編集後記

■本誌は年に一度とはいえ、編集内容に苦しむこともあるが、紙面の向こうに見える多くの OB、OG の顔を思い出すと頑張れる。しかし、本号だけは出したくなかった。内容がマイナスイメージだけに、「どう伝えるか？」に苦慮した。本誌の使命の一つは、この一年間の出来事を部の歴史としてきっちりと後世に伝えることである。心情的には「良かったこと」だけを掲載したい。しかし、「良い事」だけで歴史が刻まれているのではない、「悪かった事」も含めて総てが歴史である、そう自分に言い聞かせて、存亡の危機であった「負の一年」を総括した。

■半世紀も前で、多くのＯＢの記憶から消え去っていた出来事を取り上げた、「ある日、イオラスは“あひる”になった」は、正に“読ませる”内容で興味深かった。虎の子イオラスのストラッドが強度不足という衝撃的な出来事を経糸に、当時の国産グライダーの開発と変遷、とりわけ学生滑空界の状況を緯糸にして、忘れていた歴史の一隅に光を当てて下さった岩崎氏は、かつては文筆を生業とされていただけにその筆力はさすがである。（・・・にしても、知らぬこととは言え、私は強度不足のストラッドで、しばしば曲技をやっていた。今頃になって背筋が寒くなっている）。

■スポーツを初め、様々な分野で人を鼓舞する時に「失敗を恐れず、思い切ってやれ！」とよく言われる。しかし、このようにしてはならない世界がある。航空部がそうである。他には山岳部などもそうであるかも知れない。失敗は自己あるいは仲間の命を失うことになる。空も山も大自然が相手である。空はもともと神と鳥類の領域であった。そこに飛べない哺乳類が“挑む”気になってはいけない。自分の技量と知識をよくわきまえ、その範囲内でベストを尽くして見えない相手と“折り合いをつける”のである。「己を知り、謙虚に」これが原則である。

■抜きん出ようとするなら、空が“折り合い、受け入れてくれる”範囲を広くするしかない。即ち、腕を磨き、知識と経験を増やすことである。

■何時まで経っても関西東海が関東に勝てない原因の一つは、二、三校が合同で「仲良しクラブ」のような、その上２，３日の短期間合宿を繰り返している同好会的練習形態にある。これでは、「勝つ」ために大学毎に創意工夫をした独自性のある練習など出来る分けが無い。現状の練習形態しか取れない原因は何なのか？そこから脱却するためには何をどうすれば良いのか？「勝ちたい」と思わないのなら話は別である。そうでないなら現状打破の努力をしなければならない。その中にあって、我が校も同じである。他校と同じことをしていては、それ以上になれる訳がない。関西東海の全指導者よ、奮起せよ！

■合宿予定の発表の度、いつも疑問に思うことがある。何故、少ない日でも三、四人、多い日（土日）には六、七人もの教官が来ているが、どういう目的で依頼しているのだろう？多人数の指導者を必要とするほどの機体数を使っているのか？　はたまた、大勢でないと指導や安全運航に支障があるのか？　依頼もしていないのに勝手に押しかけて来る教官はいないだろう。　教官によって教え方の上手下手もあれば、指導の着眼点や、課目の不出来の許容範囲も異なるし、言葉の表現も違っているはずである。それが教官の個性であるが、個性の違う教官に代わる代わる指導される学生は、混乱して「？」と感じる事はないのか、もう一方では、合宿経費の観点から、必要数以上の教官への交通費、謝礼、その他経費は合宿費を高騰させることにならないか？そして、何よりも強く思うのは、多くの教官が居て、気配り目配りしていたら、「たるんでいる」としか言いようのない不祥事が連続するはずがない。教官側の自己検証も必要であると考えるが、どうだろう？

■部の再建を図らねばならない今、全てを見直してゼロからリスタートしなければならない。部員も指導陣も。部の目標と、目標達成への具体的計画、それに沿う個人目標、両方の達成管理、部全体（チームとして）の体質強化・意識改革、一合宿の日数と年間合宿数、適正な教官数と使用機数等の合理的、能率的な練習形態等々、大学生らしく、先ずは自分たちで能動的に考え、実行することだ。「むずかしいかな」と思う事は、監督、コーチ、部長、顧問、OB に遠慮せずに相談すればいい。相談もせずに放置することが一番いけない。「こうしたい」、「こうあるべきだ」と考えて、声に出すことが大事で、考えない事は永遠に実現しない。

■来年は明るく、希望に満ちた内容で翔友 32 をお届けしたいと願う。皆さんお元気で！

翔友 31　〈非売品〉　編集　翔　友　会
2016 年 6 月 1 日　発行　同志社大学体育会航空部
印刷　同志社大学プリントステーション